

明治の書生



- 【明治の書生】
- 第一回 いざ、東京へ
 - 第二回 書生とはなんぞや
 - 第三回 勉強するぞな!
 - 第四回 書生名物「寄席」と「下宿がえ」
 - 第五回 やろつぞな! ベースボール
 - 第六回 無銭旅行
 - 第七回 友との別れ
 - 第八回 それぞれの旅立ち

十年はひと昔とやら、
焼きいもをかじりながら歌を練習し、
服を質屋さんにあずけて得たお金で寄席に遊んだのも、
思えば昨日のことのよう。
私も気がつけば、早くも一人前のおじさんぞなもし。
秋山君やみんなは今ごろなにをしているだろうか。
ほうじや!
愉快な仲間たちと過ごした書生時代の思い出を題材に、
話を書いてみよう。

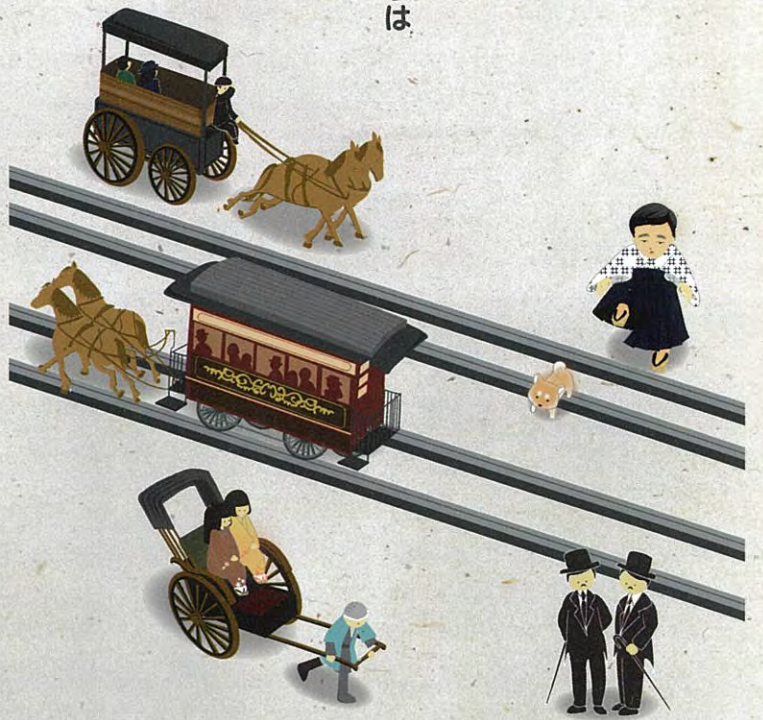


正岡 子規

第一回いざ、東京へ

ときは明治十六年六月十四日

あつき思いを胸に、東京・新橋停車場に降り立つは
伊予松山生まれの正岡常規(子規)君。



先に東京に来ている友たちの
住まいを目ざす道中のこと。

鉄道馬車の鉄のレールが
しかれてある通りにさしかかった正岡君。
これをまたいでもよいものやらどうやらわからず
ためらっております。

すると、小さな犬でさえも堂々と
横切っているではございませんか。
こわごとと鉄のレール上を横切り、
先を急いだのであります。



なにをするにも東京だ!

さまざまな菓子パンが
つくられるようになった明治時代。
またたく間に人びとの
人気を得たのであります。
正岡君も上京初日に食べていらしい、
菓子パンのとりこになったとか。

ん〜うまい!

ほつぺたがおちそうじや



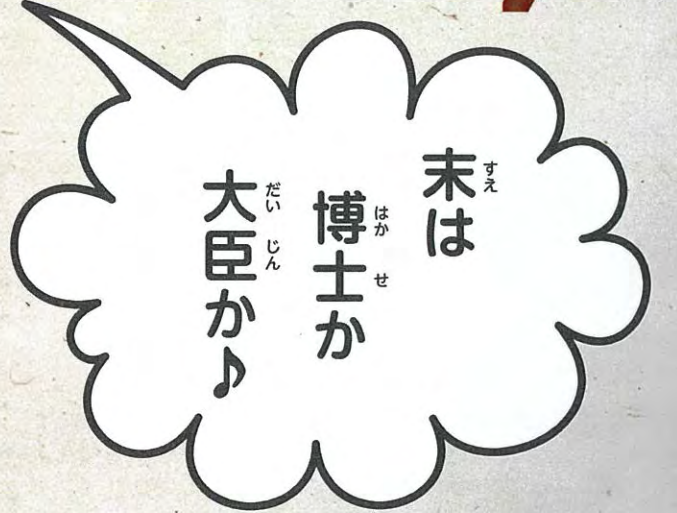
第二回 書まとはなんぞや

正岡君のとなりで歌うは、
正岡君と同じく

松山からやってきた秋山真之君。

正岡君、秋山君をはじめ、学問をつみ、
世に認められるような人をめざして
勉強にはげむ学生たちを、

「書生」と呼んだのであります。



木綿の着物の下に立ちえりのシャツ、
足のくるぶしが見えるほど短い袴、

帯には手ぬぐいをはさみ、下駄をはく、

これが当時流行の書生ファッションなのであります。

彼らが好んで着ていたひどく長い羽織は、

「書生羽織」と呼ばれておりました。

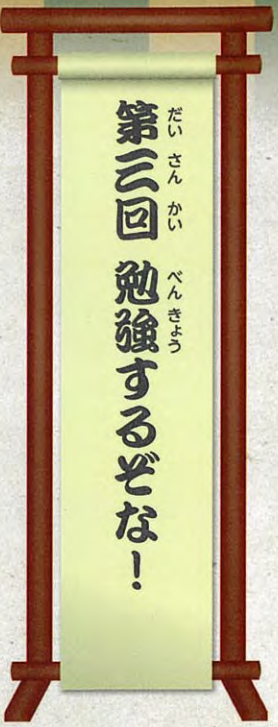
夏には、麦わら帽子をかぶったものであります。

第三回 勉強するぞな！

さて、世に認められるような人をめざして、
よりよい教育を受けようと

全国から

東京の学校に集まる若者たち。



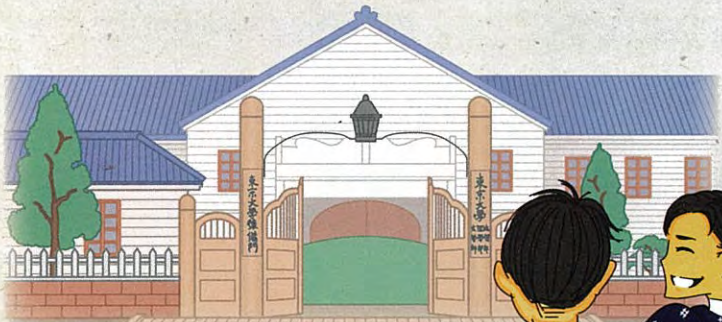
きょうりゅうがっこう
共立学校

なかでも「東京大学予備門」は、
当時日本で一番むずかしい学校として知られ、
書生たちのあこがれでありました。
若者のおおくは
「共立学校」に入り、
受験のための勉強をしたものであります。



けいおうぎじゅく
慶應義塾

とうきょう
東京



とうきょうだいがくよびもん
東京大学予備門



正岡君は明治十七年九月、
秋山君は明治十八年に
東京大学予備門入学を果たし、
より一層勉強にはげみました。

東京大学予備門でどんな授業がおこなわれていたか。
外国から輸入した教科書が使われ、
授業中の会話も

すべて英語であることもしばしば。



先生、日本語で授業を
しておくれんかなもし。
どんな問題が出されて
いるのかさえ、わからんぞな...



英語でおこなわれる「幾何学」という授業。
予備門一年生の正岡君は、二回の定期試験で
「幾何学」が不合格になってしまい落第。

このとき、正岡君と同じようにクラスメートの
三分の一が落第したといわれております。
日本で一番むずかしい学校、東京大学予備門。

当時のエリート青年にとつて、
定期試験を順調にクリアし、
進級していくことは簡単なことではなかったのです。

正岡君は、一年遅れで入学してきた秋山君と同級生になり、
さらに仲が良くなりました。

第四回 書生各物「寄席」と「下宿がえ」

さてさて、勉強もはやることながら、

書生たちはさまざまに遊びに熱中いたしました。

その一つが落語や講談、娘義太夫といった

寄席で上演される芸能でございます。

落語や講談は、はなし家が扇子を手に持ち、

歴史物語や庶民の暮らしをとりまく

さまざまなる出来事をたくみな話術で語ります。

娘義太夫は、三味線の奏でる音にあわせて、

若い女性が物語を語ります。



どうする、どうする〜

物語が盛り上がりを見せると、

書生たちのかけ声がとびかっただけです。

ただでさえ貧乏暮らしの書生が

寄席に夢中になったら、さあ大変。

服を質屋にあずけ、そのお金で

ひいきの娘義太夫が出演する

寄席に通いつめるものもありました。



寄席通いに夢中になっていた書生たち。
下宿に帰っても寄席の歌をみんな
よく稽古したものであります。

書生の名物に「下宿がえ」がございます。
その名のとおり、書生たちのおおぐが、
住む場所をたびたびかえていたのであります。

荷物の移動は大変だろう。

なぜ、引っ越しするのかわって、

それは、書生のおおぐが貧乏で、お金がない。

食事つきの小さな部屋に二、三人。

少しでも安くと下宿代をおさえていました。

部屋がうす暗い、きたない、

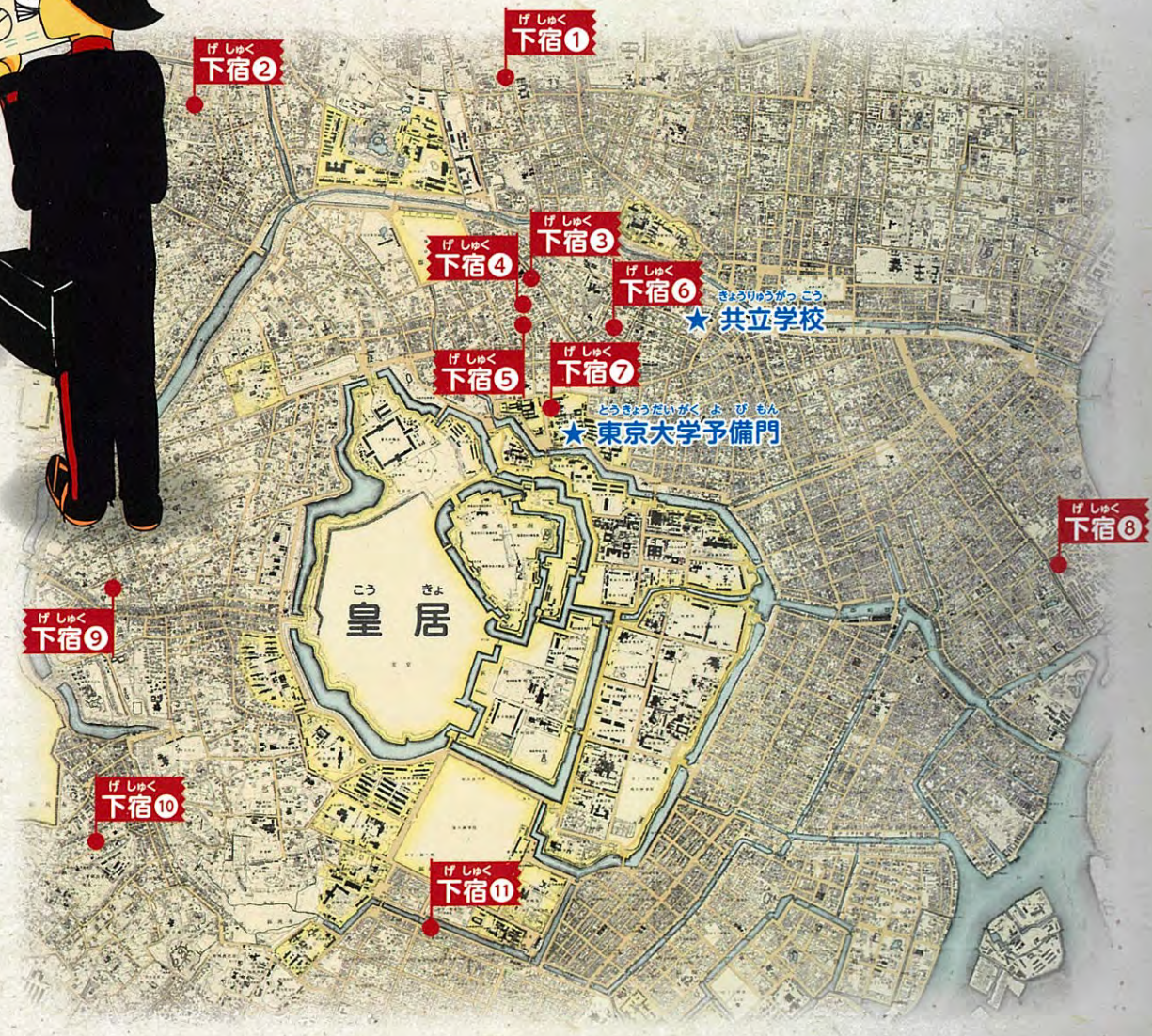
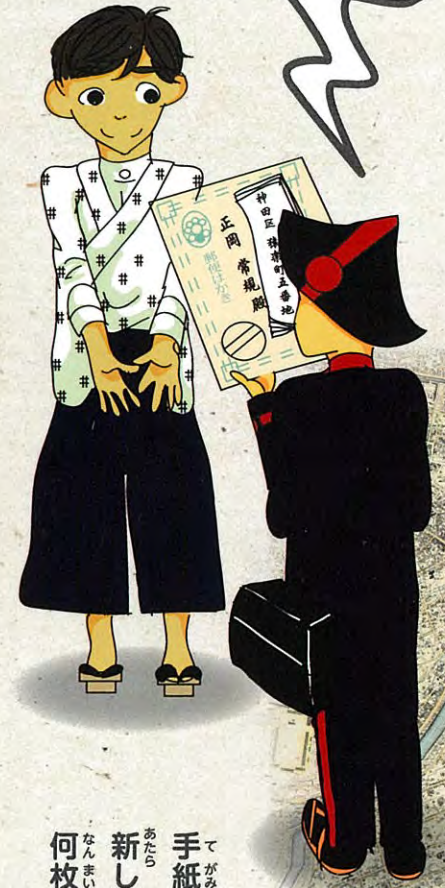
栄養のある食事が出されないなど、がまんの日々。

住んでいるうちに健康をそこねてしまう。

少しでも環境のいいところを探しては

引っ越していたのであります。

書生さん、
便りが届いてるよ！
ずいぶん下宿がえを
したもんだねえ。



手紙には、これまでの下宿先の住所のうえに、
新しい住所を記したうすい紙が
何枚も貼られて配達されたのでございます。

なんにするかい？
お得意さんの正岡君のために、
今日は流行りの
『当世書生気質』という本を
もってきたんだが
どうかいっ？



借金続きで下宿代を払えないこともしばしば。。。
ある年末のこと、正岡君と一緒に住んでいた清水君、
井林君は、払えない下宿代がたまり、
家主からの催促にたえられなくなっていました。
井林君は、一番先に逃げてしまい、
正岡君と清水君はなにやら相談をしておりました。

おおみそかの十二月三十一日、
ぼくは友だちの家に
逃げるから、
清水はここで布団をかぶって
ひたすら寝たふりだ。
いちがつついたち
一月一日の元日になったら、
旧松山藩主久松家の
お殿様のお屋敷で会おう。



ひたすら空腹にたえた
年の暮れ。
正月に再会して
お互いの顔をみて大笑い。

おなかと背中がくっつきそすだよ…。



下宿にやってくる
貸本屋から本を借りては、
いろいろな本を読む毎日。

第五回 やろつぞな！
ベースボール

やろつぞな！ベースボール

正岡君や秋山君たちが東京大学予備門に通っていたころ、書生たちのあいだで流行ったベースボール。

日本にベースボールが伝わったのは明治五年のこと。

アメリカ人のホーレス・ウィルソンなる人物が

教師として日本にやってきた。

第一学区第一番中学（現在の東京大学）で

英語や数学を学生たちに教えるかたわら、

ベースボールも教えたのがはじまりといわれております。

その後、東京大学予備門などの学校にも伝わり、

そこでベースボールを体験した人たちによって、

全国へとひろまっていたのでございます。

このころの正岡君はベースボールに熱中し、バット一本、球一個を生命のようにおもっていたようです。



さまざまなおスポーツを
楽しんでいた書生たち。

ボート競争もさかんに

おこなわれておりました。

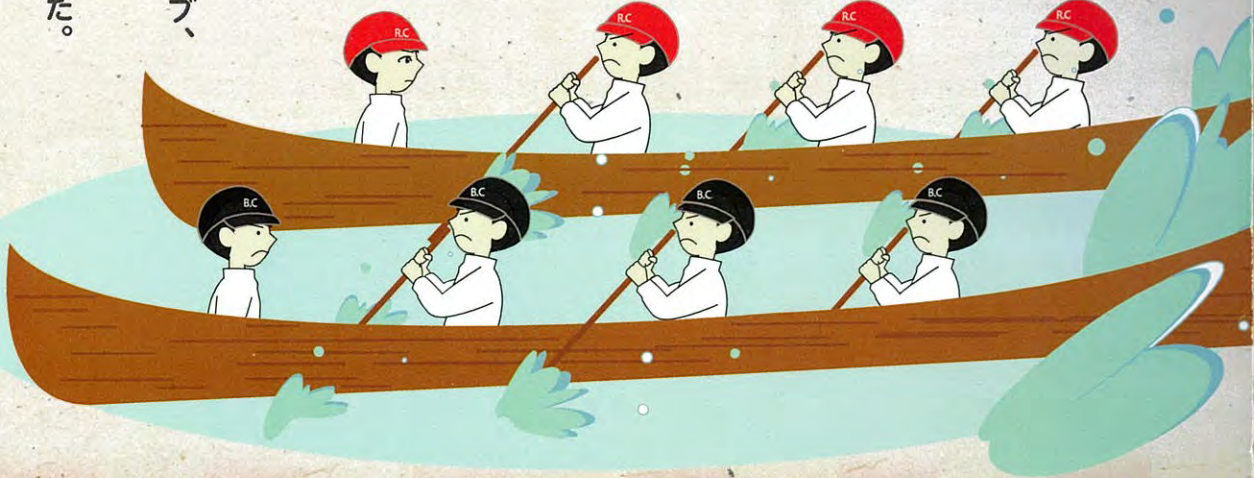
東京大学予備門にも

ボートのクラブがたくさんあり、

正岡君は赤い帽子のレッド・クラブ、

夏目金之助（漱石）君は

黒い帽子のブラック・クラブでした。



夏目君のブラック・クラブには負けるな！

第六回 無銭旅行

「旅も書生の楽しみのひとつでございます。

とはいえ、なんといっても書生はお金がない。

わずかなお金で出かける仲間との旅路、

さまざまなおもしろい話が生まれたのでございます。

いまから行こう！歩いて鎌倉へ

ある晩のこと、正岡君や友人たちが

下宿につどっておしゃべりをしていました。

「先日の江の島、鎌倉旅行はじつにおもしろかった」と友人のひとり。

お金がないから食べることも、泊ることもできず、

ただひたすら歩き続けて…と、

おもしろおかしく語ります。

すると突然、秋山君が鎌倉行きを

思い立ったのであります。

さあ、結末や如何ん！無銭旅行のはじまりはじまり。



午前二時ころ 品川を通過

スタスタと先頭を歩くは小倉君。

秋山君、正岡君、清水君はすでに

靴をひきずりながら、ぼたぼた歩き。

出発したときの勢いはぐいへやら。

夜明け前には、歩くのか眠るのか

わけもわからず…ゆらゆらゆら。

夜の十二時ころ、
神田猿樂町の下宿を出発！

旅の仲間、

秋山君に正岡君、

清水則遠君、小倉修吉君。



夜明け、鶴見から神奈川へ

すっかり夜が明けて、
なにやらぶくんとよい香りが。
あらわれたるは、道ばたに
餅を並べて売るお店。
正岡君と小倉君、
昨夜からの疲れと空腹で
思わず鼻を二、三度スノスコいわせて
通り過ぎたのであります。

遅れ気味の秋山君、清水君を待つて…

いまの餅はどつだ。
うまさうじやったな。
当たり前よ。うまさうじなら、
なぜ買わなかったんじや。
恨めしげに話すは秋山君。
引きかえす元気もなく、ふたたび、いざ鎌倉へ。



朝、神奈川停車場近くの橋のうえ

駅ではちょうど蒸気機関車が発車準備中。
足がだるいから見ていこうと、
橋の上でたたずむ四人。
ポッポー！ 汽笛一声！
発車した汽車が橋の下に入ったとたん、
真っ黒な煙が鼻や口の穴からプツと入って煙まみれ。

ゴホゴホゴホッ。
すきつ腹にこたえるぞな。
もういっそここから
帰ってはどうじや。
行けば行くほど
家が遠くなるぞな。

ここまで来て
帰るやつがあるものか。

ほな行こうや。



保土ヶ谷、道行く人に笑われながら…

駅で買ったふかしイモを食べながら、再び珍道中。
小倉君はあいかわらず元気にスタスタ。
正岡君は疲れてそのあとを、
秋山君と清水君は
はるか後方からヨボヨボと。

オイどうじや、
もう休もうやないか



十二時ごろ、戸塚の手前で昼ごはん

東京を出てからはじめての飯。
うまいのお〜

その場に寝転んだ秋山君、
すべにいびきを高だかとおげて眠り込む始末。
一時間ほどがたち…



ほじやけど、とてもこの足では
東京まで帰るのはむずかしいのお。
汽車賃でもあればええんじやが…

あしのお金を数えてみたら、
四人の汽車賃とあと少しあるぞな。

助かった…

神奈川停車場まで
がんばって歩こうや。

屋すぎ、神奈川停車場から
汽車で新橋へ

やっと帰れるぞな…

ははははは。

汽車に乗り込んで、
ほっとひと安心。
窓から街道を眺めながら、
東京へと戻ったのであります。

第七回 友との別れ

書生のおおくがお金に余裕がなかったこの時代、

「脚気」と「胃痛」が

書生の二大病として知られておりました。

「脚気」は「ビタミンB1」という

栄養が足りないことから、

あしのむくみやしびれをひき起こします。

脚気は、症状が進んでしまうと

心臓のはたらきが低下し、

最悪の場合は死にいたってしまっ

おそろしい病なのでございます。

清水君は

とつてもおほかで

やさしくて…。

ぼくが望んで一緒に

住んでいたのに、

気がついて

やれなんだ…。



半年前には、
一緒に無銭旅行を
楽しんだのに…。



第八回 それぞれの旅立ち

末は博士が大臣か、

世に認められるような人をめざして

一生けんめい学問にはげみ、

さまざまな遊びにも熱中した明治の書生たち。

正岡君、秋山君、そして彼らの仲間たちは、

陽気な書生の熱気につつまれながら、

それぞれの日本一をめざしたのであります。

明治十九年春のこと、正岡君や秋山君たちは、
大切な仲間の清水則遠君を、脚気のために失いました。
清水君の親は松山にあり、

すぐに駆けつけることができません。

正岡君が代表になり、秋山君たち仲間と

力を合わせてお葬式をあげました。



大切な友を失った翌日のこと。
正岡君は仲間からお金を集め、
手元にのこるたった二枚の清水君の
写真を手本に油絵を描いてもらいました。
松山にいる清水君の家族のために、
東京で書生生活をおくっていたころの
清水君の姿をのこそうとしたのでございます。
完成した絵は、
松山に帰る友人によって、
清水君の家族のもとへ
届けられました。



政治家
菊池 謙二郎



博物学者
南方 熊楠



工学博士
神谷 豊太郎



英文学者・小説家
夏目 漱石



新聞記者・俳人
正岡 子規



海軍軍人
秋山 真之



書生、書生と軽蔑するな、

明日は太政官のお役人♪

書生、書生と軽蔑するな、

フランスのナポレオンも、

もと書生♪

「書生節」

「明治の書生」の話はどうじゃったかな？
クイズを三問出しておしまじや。
答えは、十六ページの下の下にあるぞな。



一問目

扇子を手に持ち、たくみな話術で語ります。
書生が夢中になった芸能はなんぞや？

二問目

少しでも環境のいいところを探して…
書生はなにをよくかえていたんじやろ？

三問目

アメリカ人のウィルソンなる人物が日本に伝え、
書生たちが熱中したスポーツはなんぞや？

末は博士か大臣か♪
これにて、「明治の書生」は
おしまいおしまい。

絵本「明治の書生」

第九回企画展テーマ展示

「近代国家制度の形成」 子規・真之の青春

企画・編集／徳永佳世(坂の上の雲ミュージアム学芸員)

イラスト／國田絵里香、佐藤しおり、林真央

協力／河原デザイン・アート専門学校

制作／セーラー広告株式会社

発行日／二〇二五年二月二十四日

発行／坂の上の雲ミュージアム

坂の上の雲ミュージアム
SAKA NO UE NO KUMO MUSEUM

